

『秀歌大躰』と『詠歌之大概』

片山 享

一

『秀歌大躰』は古今集・後撰集・拾遺集・新古今集から古歌一二首を抄出した秀歌撰である。諸本に「定家卿被撰進 後堀川院なご／＼貞治四年正月七日頼阿以自筆本書写事」の奥書があり、現行伝本は頼阿自筆本を経たもので、「井蛙抄」跋文に、後堀河院へ書進せられたる秀歌大躰、梶井宮へ進ぜられたる詠歌大概、おの／＼数十首古歌をのせられたる、たゞうるはしき一体なり。

とあり、宗祇「老のすさみ」や幽齋口述の「耳底記」などもこの所伝を疑うことなく、「日本歌学大系」解題で久曾神昇氏は

定家編と認め、石田吉貞氏もその妥当性を認められた。その成立年時については三説があり、(1)久曾神氏は定家の「三代集之間事」(貞応元年)、「三代集辭案抄」(嘉応二年)の著作や所謂貞応本・嘉禄本をはじめ、この時期古今集・後撰集・拾遺集を書写していることから貞応元年(一一三三)一・一一三二(六)頃と推定され、(2)石田氏は後堀河院十五歳から二十歳とすれば、嘉禄二年(一一三二)一・一一三一(一)頃で、定家六五歳から七十歳の間と推定されている。その後(3)樋口芳麻呂氏が、

定家は後堀河天皇から貞永元年(一一三三)六月に、古今の歌を撰進せよとの勅令を受けている(後に「新勅撰集に結実する)。定家としては撰集下命者の後堀河天皇から御製を下

賜してもらって集を飾ることをもちろん希望したのであらう。

天福二年(一一三四)五月に後堀河院から御製五首を頂戴する。「新勅撰集」の伝本である宮内庁書陵部蔵飛鳥井宋世與書本によると、定家はこの五首の下賜について「付内外望三ケ年」と失望とも悲鳴ともいえそうな感想を漏らしている。――が、定家としては「後拾遺集」の佳例(「後拾遺集」には撰集下命者の白河天皇の歌が七首収められている)に倣って御製をあと二首賜わりたい旨を奏上している。このように後堀河院があまり詠歌に熱心でないことを考慮すると、「新勅撰集」撰進の始め、撰集下命者として御製を載せる必要に迫られた後堀河院が定家に詠歌の教えを乞い、それに答えて定家が「秀歌大体」を進献したとも、それともまた、思慮深い定家のことだから、撰集下命者に帝王調の晴れの歌を詠んでもらい集を飾りたいと願って、院の作歌の参考になるように「秀歌大体」を定家の方から進献したのではないかと推測される。いずれにしても「秀歌大体」の成立は「新勅撰集」撰進の奉勅以後、すなわち貞永元年六月以後と考えてよいのではなからうか。

とされて、貞永元年(一一三三)以後と前二説に比べ更に引き下げられている。

後堀河院詠歌は、「皇室文学大系」第二巻御製集に「後堀河

天皇御製」として九首が載せられているが、「名所月貞永元年六月」三首は「新編国歌大観」第五巻解題に佐藤恒雄氏がこの歌合の「女房」は道家で流布本板本が「後堀河院」とするのは誤りであると指摘されるごとく、後堀河院詠歌ではなく、「新勅撰集」入集歌五首の他には「夫木和歌抄」に収められた「菊」「むしろ田のいつぬきかけし玉ならむ千年をちぎる菊の白露」一首のみで、極めて少く、和歌に堪能でなかったことが知られる。「新勅撰集」入集歌五首は次の通りである。

うへのをのことも、としのうちになつはるといへるこ、ろをつかうまつりけるついでに

(1)あらたまのとしもかはらでたつはるはかすみばかりぞそらしりける(春上・一)

うへのをのことも、海辺月といへる心をつかうまつりけるついでに

(2)わかのうちらあし辺のたづのなくこゑに夜わたる月のかげぞひさしき(秋上・二七一)

うへのをのことも、未見恋といへる心をつかうまつりけるついでに

(3)やまのはをわけいづる月のはつかにも見てこそひとは人をこ

ふなれ(恋一・六八四)

うへののをのことも、忍久恋といへる心をつかうまつりける
ついでに

(4)よそののみおもひふりにしとし月のむなしきかずぞつもるか

ひなき(恋二・七四二)

をのことも、述懐歌つかうまつりけるついでに

(5)くりかへしづのをだまきいくたびもとをきむかしをこひむひ
ぞなき(雑二・一一五七)

これら五首は共に平明・優美な歌であつて、大粹として『秀歌大粹』の範圍を逸脱していないように思われる。『秀歌大粹』の立春霞は三首あつて、

(1)昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはや立にけり(拾遺・春・三、赤人)

(2)春がすみたてるをみればあら玉の年はやまより越る成けり

(拾遺・春・二、文幹)

(3)はるたつといふばかりにや御吉野の山もかすみて今朝はみゆらん(拾遺・春・一、忠岑)

(○は定家八代抄入集歌を示す)

で、いずれも曆法上の立春とともに山に霞が立った(または立つてであろう)ことの驚きを強調した歌である。院の(1)歌がこれ

らを参考にして発想されたか否かはわからないが、「あらたまのとしもかはらで」と詠み、山の霞を空に拡散したとみれば、あるいは院は年内立春題で、これらの歌を参考に年内立春の霞を詠んだのかもしれない。

(2)は、古今集仮名序の赤人歌「わかぬ浦にしほみちくれば方をなみ芦べをさしてたづなきわたる」を本歌として海辺月を詠んだ歌で、『秀歌大粹』の人麿・赤人を重んじる傾向と一致している。

(3)が最も問題となる歌である。『秀歌大粹』の独自性は後述するように人麿を中心とした万葉歌人重視の傾向である。もともと人麿重視は既に『定家八代抄』にみえるもので、その根源は『拾遺集』愛好に端を発している。これについては、菅て阪口和子氏の「定家の『拾遺集』享受について——二四代集恋部を中心として——」という優れた論考があつて、『三代集之間事』跋文にみえる「集」と「抄」に関する後鳥羽院の文言を引いた「拾遺之抄出極任意事賦。其哥之鉢為_レ先_二平懐_一、是即花こそやどのあるじなりけれ分限之同類賦。甚深妖艶之風情多_二泔_一之。尤捨抄用集者可_レ為_二道之本意_一」から定家は集の特色を人麿の恋歌にあるとみていたことを考察されたのであるが、『秀歌大粹』の恋歌一三首中七首が人麿歌で、恋歌独自性の基

調をなしており、かつ極めて特異なものである。その二三首を掲げる。

② おく山の岩がきぬまのみごもりに恋やわたらむあふよしをな

み (拾遺・恋一・六六一・人麿)

③ 足引の山鳥のおのしだり尾のながくし夜をひとりかもねん

(拾遺・恋三・七七八・人麿)

④ 箱のうへにふるはつ雪のあさ氷とけずも物をおもふころかな

(拾遺・恋三・八四六・よみ人しらす)

⑤ あし曳の山よりいづる月まつと人にはいひて君をこそまで

(拾遺・恋三・七八二・人麿)

⑥ みなとりの声分を舟さはりおほみ我思ふ人にあはぬ比かな

(拾遺・恋四・八五三・人麿)

⑦ 波まよりみゆるこ島のはまひさぎ久くなりぬ君にあはずて

(拾遺・恋四・八五六・よみ人しらす)

⑧ ますかゝみてにとりもちて朝なくみれども君にあく時ぞな

き (拾遺・恋四・八五七・人麿)

⑨ よそにのみみてややみなんかづらきや高間の山の嶺のしら雲

(新古・恋一・九九〇・よみ人しらす)

100 をとにのみありと聞こし御吉野の滝はけふこそ袖に落けれ

(新古・恋一・九九一・よみ人しらす)

⑩ 足引の山田もる庵にをくかびのしたこがれつ、我こひらくは

(新古・恋一・九九二・人麿)

⑪ その神ふるのわざ田のほには出ずこ、ろのうちに恋やわた

らん (新古・恋一・九九三・人麿)

100 時雨ふる冬の木葉のかはかずぞ物おもふ人のそではありける

(新古・恋一・一〇五四・よみ人しらす)

101 我恋はありその海の風をいたみしきりによする波のまもなし

(新古・恋一・一〇六四・伊勢)

序詞に傍線、比喻に点線を付したように、一三首中九首までが

序歌で、三首が比喻表現の寄物陳思の歌という極めて独特な撰

歌といえよう。

院は未見恋の歌題で、

やまのはをわけいづる月のはつかにも見てこそひとは人をこ

ふなれ

と、これらの序歌の例歌にならって「はつかにも」を引出す序

歌として発想し、世の人は僅かにでもその人を見て恋する習い

なのに、私はどうしてまだ見ぬ人を恋慕うのだろうかと未見

恋の佻しさを詠んだものと思われる。

(4) は例歌99の「よそにのみ見てややみなん」の語句をかすめ、

(5) は「伊勢物語」の著名な「いにしへのしづのをだまき繰りか

へし昔を今になすよしもがな」を本歌として、これにすがった
同想の述懐歌を詠んでいるのであって、後堀河院詠歌が初心な
るが故に「秀歌大幹」の影響がほの見えるような感觸が感じら
れるのである。こうしてみると、樋口氏推定の妥当性が思われ
るのであって、後堀河院の新勅撰集入集歌五首に「秀歌大幹」
の影響が見られるとすれば、進献時期は下命の貞永元年（一二
三二）六月一三日以降、待望の御製五首を賜り、仮奏覽を終え
た天福二年（一二三四）六月三日以前と限定することができま
う。

一一

『秀歌大幹』の伝本は、久曾神昇、久保田淳氏によって明ら
かにされたように、歌題に集付を記し、歌尾に作者名を記した
本とそれらを有さない本がある。この注記は彰考館文庫本奥書
に

此作者等引見本集私注之

天正十八季孟夏中六 也足子

とあって、天正一八年（一五九四）中院通勝が記したものと知
られ、また書陵部鷹司本にはこれとは別の注記が付されている

ことが久保田淳氏によって指摘されているが、これらの注記は
後に付せられたもので、原本はこれら注記を有さないものであ
ったと考えられる。また諸本によっては歌数に出入りがあり、
「歌学大系」の底本とされた久曾神本は2・28・68を欠く百九
首本、通勝與書をもつ彰考館本は69を欠く百一一首本である。
百九首本も流布していたようで、柿衛文庫蔵「秀歌大幹」注
（萩原宗固・寛延四年）には「此書に載られたる和哥、古今集
四十七首、後撰集七首、拾遺集三十一首、新古今集二十四首な
り。通計百九首歟。或本に百拾九首とあるは拾字衍文なるべ
し」として與に「一本」として2・28・68を中院通勝本によつ
て記している。これらの欠脱歌を有さない百二首本一本が久
保田淳氏が「歌論書一」の底本とされた東大国文研究室蔵「秀
歌大幹」で、箱書により宝永六年（一七〇九）没の前権大納言
従一位葉室頼孝筆とされる本で、集付・作者名をもたず、頼阿
自筆本書写の奥書を有する。ただ47・48歌に独自の歌順異同が
ある。ここで注目されるのが、井上宗雄氏のご調査で知られる
ようになった園部町教育委員会所管の小出文庫本「秀歌大幹」
である。本書は袋綴一冊。表紙は薄茶地に草花を描き、花卉に
銀泥を施す。左肩に金地小短冊で「和哥詠方 姉小路基綱卿
筆」の題簽がある。縦26・8センチ、横21・0センチ。本文料

紙楮紙。前の遊紙に貼紙して「正風舛抄／秀哥大舛／ある人の哥ハ／京極中納言相語云」とあり、左肩に「姉小路基綱卿」の古い紙片を貼布する。姉小路基綱は一四四一〜一五〇四の生涯を生きた人で、基綱筆か否かは不明であるが、ほぼこの時代宝町後期の書写と思われ、内容は、

正風舛抄 第一丁〜第七丁オ

奥に「正風舛終一校了」とある。

秀哥大舛 第七丁ウ〜第一丁オ九行で

奥に「定家卿被撰進 後堀河院云々

貞治四年正月七日以領阿自筆本書写云々」とある。

ある人の哥ハ（近代秀歌）

第一一丁オ一〇行〜第一四丁ウ

奥に「承元元比自征夷將軍依被尋先人所

進之秘書也

弘長二年九月老後更書写之云々

三代撰者桑門融覺在判

京極中納言相語云

第一五丁オ一第一八丁オ四行

で、内容的には東大国文研究室本と同じで、同系統本と認められ、東大本の題簽「正風舛抄／秀哥大舛／定家卿説方口伝／京

極中納言雜談」の近代秀歌を「定家卿説方口伝」とするのは本書題簽の「和哥説方」と何らかの関わりがあるかも知れない。ただし東大本全体の奥書「此一冊全一見畢 宗祇（花押）」は本書にはない。こうして小出文庫本は東大研究室本よりも領阿自筆本の原形に近い善本と考えられるので、本書に換えることにしたい。

三

「秀歌大舛」は定家他の秀歌撰とは全く撰歌基準を異にした秀歌撰である。他の秀歌撰との重出歌を一覧表にして示す次のごとくである。

近代秀歌 原形本	秀歌大舛	
0	112	秀歌大舛
25	0	近代秀歌 原形本
25	76	定家八代抄
11	4	八代集秀逸
15	6	近代秀歌 自筆本
11	12	秀歌之舛 大略
6	9	百人一首

百人一首	秀歌之鉢 大略	近代秀歌 自筆本	八代集秀逸	定家八代抄
9	12	6	4	76
6	11	15	11	25
92	103	83	80	100
36	41	48	80	80
28	57	83	48	83
28	100	57	41	103
100	28	28	36	92

『定家八代抄』と定家の秀歌撰が密接な関係を有することに
 ついてはつとに久曾神氏の『二四代集と定家の歌論書』に説か
 れたごとくで、『定家八代抄』抄出以前の『近代秀歌』原形本
 (秘々抄本)も全歌が一致し、『八代集秀逸』『近代秀歌』自筆
 本例歌、『秀歌之鉢大略』も総て『定家八代抄』の枠内に留ま
 り、歌人重視の故に『定家八代抄』の枠内に留まりえなかつた
 と思われる『百人一首』にして九二首(92%)が一致している
 のに對し、『秀歌大鉢』重出歌は一二二首中の七六首(68%)
 の低率に留まり、前期論文では久曾神氏も定家編に極めて慎重

な姿勢をとられているのである。

次に他の秀歌撰との関係。『近代秀歌』原形本例歌は近代歌
 人経信以下六人の秀歌を掲げたものであるから、三代集歌人の
 歌を抄出した『秀歌大鉢』とは一首も重なり合わないのは当然
 であるが、『秀歌大鉢』の成立を前述のごとく推定すれば、最
 も近接した天福二年九月に仁和寺宮に進献した『八代集秀逸』
 は八代集から各十首の秀歌を抄出したものであるから三代集三
 十首は重出してもよい筈であるのに僅かに四首、『近代秀歌』
 自筆本では八三首中六首(7%)、『秀歌之鉢大略』では一〇三
 首中一二首(12%)と漸増するものの低率に過ぎ、『秀歌大鉢』
 が他の定家の秀歌撰とは異なつた撰歌基準に立つものであつた
 ことが明らかである。

このことについて近世期にも疑問が持たれたよう、発端は
 他ならぬ『井蛙抄』跋文の

後堀河院へ書進せられたる秀歌大鉢、梶井宮へ進ぜられたる
 詠歌大概、おの／＼数十首古歌をのせられたる、たゞうるは
 しき一体なり。

で、『詠歌之大概』付載の『秀歌之鉢大略』と『秀歌大鉢』を
 共に古歌と呼び、「うるはしき一体」としている。頼阿は『愚
 問賢注』にも

京極入道中納言鎌倉右相府注被_レ送近來秀歌并梶井宮被_レ進古歌、被_レ奉_レ後堀河院_二秀歌大體など、常可_レ被_レ御覽_一歟。心を古風にそめ、詞を先達にならば、誰人不_レ詠_レ之哉と侍る、尤為_二肝要_一者也。

と答えており、「近代秀歌」「秀歌之幹大略」「秀歌大幹」を同等の古歌撰と扱っている。これについて松井幸隆(中院通茂門)の「愚問賢注」の注釈書「愚問賢注六窓鈔」では「秀歌大幹」について、

此書四季恋雑を分てかきつらねたる書なり。是はみな古哥也。
梶井ノ宮へ被_レ進秀歌被_レ進_二後堀河ノ院_一古哥と有べきを、是又書写の誤か。

と述べて「秀歌之幹大略」を秀歌撰、「秀歌大幹」を古歌撰とする見解を示している。これを受けて萩原宗固(一七〇三—七八四)は「秀歌大幹」注釈書に、

貞辰曰、愚問賢注領阿答に、京極入道中納言鎌倉右府に注近來秀歌并梶井宮に被_レ進古歌、後堀川院被_レ進秀哥大幹など常可_レ在_二御覽_一歟。実朝公に注進_二近來秀哥ハ経信俊頼額輔清輔基俊俊成六人之歌也。梶井宮_二に被_レ進古歌とハ詠歌大概之奥に秀歌之幹大略とて記されたる百余首ノ歌なり。定家卿同時の人の哥も多入たれば古哥と書れたる心得がたきや

うなれど、領阿時代より古哥と云心歟と或人云へり。又或説に梶井宮被_レ進秀歌、被_レ進_二後堀川院_一古歌と有べきを書写の誤歟といへり。此説如何。後堀川院被_レ進秀哥大幹すなハ此書也。世に秀歌之大略を秀哥大幹と心得たる人あるも誤なり。往年光師_二に此書の哥問ひ奉りしに、秀歌大略ハ秀歌大幹にあらざるよし答へたまへり。その趣はこゝに漏し侍りぬ。此書に載られたる和哥、古今集四十七首、後撰集七首、拾遺集三十一首、新古今集二十四首なり。通計百九首歟。或本に百拾九首とあるハ拾字衍文なるべし。新古今二十四首多くハ万葉より再撰ありし歟。或ハ伊勢忠岑元真等の哥なり。かの詠歌之大概に詞不可_レ出_二三代集先達之所_一用、新古今古人哥同可_レ用之と書れたるにあわせみるべし。

古人哥同可_レ用之と書れたるにあわせみるべし。と幸隆の書写の誤り説に対しては疑問を呈するが、当時あった「秀歌之幹大略」と「秀歌大幹」の混乱に対しては光榮説を引いて別書とし、さらに本書の各勅撰集歌数を掲げ、新古今集歌の作者に触れるなど、撰歌範囲が古歌であることを語っていると思われるが、最も重要なことは「秀歌大幹」を「かの詠歌之大概に詞不可_レ出_二三代集先達之所_一用、新古今古人哥同可_レ用之と書れたるにあわせみるべし」と「詠歌之大概」に関連して古詞撰であることを指摘していることである。

四

宗固のいう「秀歌大幹」の撰歌の内容を今少し詳細に見てゆ
 くために、出典を表示すると共に、抄出歌人の一覧表を掲げる。

計	新古今集	拾遺集	後撰集	古今集	
31	7	7	3	14	春
12	2	6	1	3	夏
39	7	12	0	20	秋
9	4	1	1	3	冬
13	6	7	0	0	恋
8	0	0	2	6	雑
112	26	32	7	47	計

持統天皇	天智天皇	歌人名
		古今
	1	後撰
		拾遺
	1	新古今
1	1	計

伊勢	崇性法師	惟喬親王	在原行平	僧正暹昭	光孝天皇	藤原良房	喜撰法師	源常	平城天皇	安倍仲麻呂	よみ人しらす	大伴家持	安倍広庭	久米広純	厚見王	安貴王	山辺赤人	柿本人麻呂	
	1	1		1	1	1	1	1	1	1	23								1
			1	1							2								
2											3	1	1	1		1	1	12	
1											6	4			1		4	7	
3	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	34	5	1	1	1	1	5	20	

計	曾 彌 好 忠	紀 文 幹	壬 生 忠 見	橘 公 平 女	坂 上 望 城	藤 原 元 真	清 原 元 輔	(大歌所御歌)	醍 醐 天 皇	壬 生 忠 岑	紀 貫 之	坂 上 是 則	藤 原 敏 行	紀 友 則	凡 河 内 躬 恒
47								1	1	6	2	1	3		
7				1										1	
32	1	1			1		1		1	2	2			1	
26			1			1									
112	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	8	2	1	3	2

全体的にみると、所謂万葉伝誦歌36首、よみ人しらず歌34首、古今歌人35首、後撰歌人6首、拾遺歌人1首で、三代集を撰歌

の対象としながらも万葉伝誦歌、よみ人しらず歌の占める比率が高いのである。

万葉伝誦歌では人麿の二〇首が突出している。これは拾遺集の人麿尊重を受け、「定家八代抄」でも最大入集歌数五五首と軌を一にするが、「秀歌大幹」の比率18%は「定家八代抄」の比率3%を遙かに凌駕し、万葉伝誦歌尊重の方向性を如実に示している。

ただし、人麿歌二〇首には、

81 立田川紅葉はながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし
は古今集、秋下二八四によみ人しらずとあり左注に「又は、あ
すかがはもみちばながる、此歌右注人丸歌、他本同」とあり、
拾遺集、冬二二五には「奈良のみかど竜田河に紅葉御覧じに行
幸ありける時、御ともにつかうまつりて、柿本人麿」とあって、
「定家八代抄」は秋歌下、四五九に「註と両集入集を記し、
作者名を人麿としており、板本「二四代集」も「同(古)人
丸」とあり、定家は人麿歌と認めていたと思われるので、人麿
歌として処理した。

人麿歌は「拾遺集」では、春2、夏1、秋3、冬3、別1、
雑17、神楽3、恋51、雑春1、雑秋9、雑恋6、雑哀傷7の一
〇四首で、「定家八代抄」では春1、秋9、冬2、騷旅3、恋

34、雑6の五五首を撰んでいる。共に恋歌が「拾遺集」で55%、「定家八代抄」で62%と群を抜いて多く、阪口論文が取り上げたごとくであるが、「秀歌大幹」では春2、秋10、冬1、恋7で、前述したように恋歌7首は寄物陳思の独自性をもつが、四季歌も13首があつて、比率は逆転し、

7明日からは若なつまんとかた岡の朝の原はけふぞやくめる

(拾遺・春一八)

30田子の浦にそこさへにはふ藤波をかざして行かむみぬ人のた

め(拾遺・夏八八)

50あまの河こそわたりのうつろへばあさせふむまに夜ぞ深に

ける(拾遺・秋一四五)

51庭草にむら雨ふりてひぐらしの鳴声きけば秋はきにけり(拾遺・雑秋一一〇)

道・雑秋一一〇)

72秋かせの日ごとにふけば水ぐきの岡の木葉もいろ付にけり

(拾遺・雑秋一一一四)

78あすか河もみぢ葉ながるかづらきの山のあき風ふきぞしぬら

ん(新古・秋下五四二)

のごとき「定家八代抄」に採らなかつた生活感情のにじんだ優美な自然詠を抄出し、四季歌の基調をなしているのである。

入唐歌以外の万葉伝誦歌では赤人五首(拾遺集三首中一首、

新古今集七首中四首)、家持五首(拾遺集三首中一首、新古今

集一首中四首)以下、天智天皇一首(後撰集一首)安貴王一

首(拾遺集一首)広縄一首(拾遺集一首)広庭一首(拾遺集一

首)厚見王一首(新古今集一首)のごとく抄出率が高く、少数

入集歌からも採歌し、「秀歌大幹」が万葉伝誦歌を積極的に採

歌しようとした態度が窺われるのであつて、三代集の他「新古

今集」を採歌の対象とした理由もまたそこにあつたと思われる。

よみ人しらず歌三四首も注目すべきである。「秀歌大幹」に

占める比率は31%で、これは「定家八代抄」21%、「八代集秀

逸」8%、「近代秀歌」自筆本14%、「秀歌之幹大略」13%に比

しても高率というべく、三代集を除く勅撰集中、よみ人しらず

歌を最も多く入集した新勅撰集(九九首)の撰歌傾向とも関連

して、晩年定家のよみ人しらず歌に対する関心の高さを示して

いると言つてよい。その歌は、

12時はいまは春に成ぬとみ雪ふる遠き山べに霞なびく(新古・

春上九)

13風まぜに雪はふりつ、しかすがに霞たなびき春はきにけり

(新古・春上八)

⑭いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日と成にし物を

(新古・春上二一)

②駒なめていざ見にゆかむ古郷は雪とのみこそ花はちるらめ

(古今・春下一一一)

③旅ねしてつま恋すらし時鳥神なび山にさ夜ふけてなく(後

撰・夏一八七)

④さ夜中と夜は深ぬらし鴈がねの聞ゆる空に月わたるみゆ(古

今・秋上一九二)

⑤霧たちて鴈ぞ鳴なるかた岡のあしたの原は紅葉しぬらむ(古

今・秋下二五二)

87この川に紅葉ゝながるおくやまの雪げの水ぞ今まさるらし

(古今・冬三二〇)

⑥夕されば衣でさむし御吉野のよしの、山にみ雪ふるらし(古

今・冬三二七)

右のような古拙とも言うべき素朴な感情の流露した表現の歌や豊かな生活感情に基づいたおらかな自然詠の歌であるが、

⑦我せこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋のはつかぜ

(古今・秋上一七二)

⑧あき風のうち吹ごとに高砂のおのへのしかのなかぬ日ぞなき

(拾遺・秋一九二)

⑨いとはやもなきぬる鴈かしら露の色どる木、も紅葉あへなく

に(古今・秋上二〇九)

といった実景を伴った繊細優美な序詞的表現によって新鮮な自然を表現した歌や自然の哲理を知的な目で捉えた歌があり、また

⑩おしめども春のかぎりのけふの又夕ぐれにさへ成にけるかな

(後撰・春下一四二)

⑪いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物おもふ事のかぎり成ける

(古今・秋上一八九)

⑫秋はきぬ紅葉はやどにふり敷ぬみちふみ分てとふ人はなし

(古今・秋下二八七)

など惜春や秋思の情を詠嘆した抒情の歌を含み、よみ人しらず歌は多様であるが、基調をなすのは古雅な歌である。

右の万葉伝誦歌、よみ人しらず歌など古歌への指向を明確にしたのは「近代秀歌」の寛平以前の説である。

詞は古きをしたひ、心は新しきをもとめ、及ばぬ高き姿をねがひて寛平以前の歌にならば、おのづからよろしきこともなどか侍らざらむ。

もとより、「詞は古きをしたひ、心は新しきを求め」ることは定家の生涯を貫いた詠歌理念であって、千五百番歌合判詞や「詠歌之大概」に繰り返し述べられるところであるが、承元三年新古今歌風退廃の危機に臨んで、より古歌への傾斜を強くし

ていたことは、近代六歌仙を寛平以往の説の實踐者として位置づけていることから言えると思われる。

もつとも、定家が貫之ら古今歌人を含まない寛平（八八九一八九七）以往としたのは、

今の世となりて、このいやしき姿をいささか変へて、古き詞をしたへる歌あまたいで来りて、花山僧正、在原中将、素性、小町が後絶えたる歌のさまわづかに見え聞ゆる時侍るを、物の心さとりしらぬ人は、新しき事出でて歌の道変りになりと申すも侍るべし。

という新古今歌風の和歌史における正統性を主張するところにあり、寛平以往の説は新古今歌風の典拠となつた四歌仙以前のまだ生活と詠歌の営みが乖離せず、抒情性を豊かに秘めていた古き歌の詞に還れというのであつて、『秀歌大躰』においても四歌仙以前の歌が八一首（72%）を占め、寛平以往の説は生きているわけであるが、『近代秀歌』と大きく変つたのは『秀歌大躰』が『近代秀歌』で和歌史批判の中心に据えた貫之八首以下の31首を撰んでいることである。貫之八首を掲げる。

⑨春日野のわかな摘にや白妙のそでふりはへて人の行らん（古今・春上二二）

⑩我せこが衣はる雨ふることに野べのみどりぞ色まさりける

（古今・春上二五）

⑪さくら花さきにけらしなも足引の山のかひよりみゆる白雲（古今・春上五九）

⑫夏山のかげをしげみや玉ぼこの道行人もたちとまるらむ（拾遺・夏二三〇）

⑬河かせの涼しくもあるかうちよする波と、もにや秋はたつらん（古今・秋上一七〇）

⑭風さむみ我から衣うつ時ぞ秋のした葉も色まさりける（拾遺・秋一八七）

⑮あきかせの吹にし日より音羽山みねの木ずゑもいろ付にけり（古今・秋下二五六）

⑯千はやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり（古今・秋下二六一）

9・20・44が貫之の秀歌であることは誰人も認めるところであろう。15・75も或いは戀詞、縁語を用いて柔らかな春雨ことに縁を増す野景を詠み、或いは「音羽山」に秋風の音をきかせて峯の紅葉を詠んだ詞巧みな歌と言えよう。しかし、43・68・76を採つたのは、これらに共通するや、古風な歌詞の表現性にあつたのではあるまいか。

後撰歌人についてみると、

③ 高砂の松にすむつる冬くればおのへの霜やをきまさるらむ

(拾遺・冬二三七・清原元輔)

④ なつ草はしげりにけりな玉はこの道ゆき人も結ぶばかりに

(新古今・夏一八八・藤原元真)

元輔の鶴の羽に霜の白を重ねる冬歌は心詞相兼の暗れの歌であり、元真の重厚な夏草の歌と共に秀歌というにふさわしい。と
ころで、

2 春がすみたてるをみればあら玉の年はやまより越る成けり

(拾遺・春二)

10 かすが野の草はみどりに成にけり若なつまんと誰かしめけん

(新古今・春上二二・壬生忠見)

28 宮こ人きてもおらなむ蛙なくあがたの井どの山ぶきの花(後

撰・春下一〇四・橘公平女)

36 ほのかにぞ鳴わたるなる郭公み山をいづる今朝のはつこゑ

(拾遺・夏一〇〇・坂上望城)

四首はいずれも古今調を受けた歌であるが、2は「としは山より越ゆる成けり」の見立てに稚拙な面白さがあり、10は「若なつまんと誰かしめけん」と屏風絵に描かれない人を点じ、28は「あがたの井と」(京都一条北)の地名から自らを田舎人に擬えて都人に呼びかけた趣向、36はほのかな声で空をよぎる初郭

公を優美に表現するが、これらが後撰歌人を代表する秀歌であったか否か。文幹、公平女は共に一首入集歌人に過ぎず、また望城、忠見の代表歌と言える歌ではない。

拾遺歌人は好忠一首で、その歌は、

⑦ 神なびのみむろの山をけふみれば下草かけて色付にけり(拾

遺・秋一八八)

で、古代的イメージをもつ「神なびのみむろの山」を詠み、万葉的自然詠を志向した歌である。

こうしてみれば「秀歌大牒」は定家の他の秀歌撰と異なり、

所謂秀歌を抄出したものではなく、古雅な詞の歌を集めた秀歌撰であったと言える。

「秀歌大牒」例歌をみてくると、例えば

7 明日からは若なつまんとかた岡の朝の原はけふぞやくめる

(拾遺・春一八・人麿)

⑧ あすからは若葉つまむとしめし野に昨日もけふも雪はあり

つ、(新古今・春上二一・赤人)

⑨ あきかぜの吹にし日より久かたの天の河原にた、ぬ日はなし

(古今・秋上一七三・よみ人しらす)

75 あきかぜの吹にし日より音羽山みねの木ずゑもいろ付にけり

(古今・秋下二五六・貫之)

のごとく、他の秀歌撰には見られない上二句同一の類歌がみられ、また「山吹」三首では

②かはづなく神なび川に影みえて今やさくらん山吹の花(新古・春下一六一・厚見王)

28宮こ人きてもおらなむ蛙なくあがたの井どの山ぶきの花(後撰・春下一〇四・橘公平女)

29蛙なくるでの山吹散にけり花のさかりにあはまし物を(古今・春下一二五・よみ人しらず)

と三首共に「蛙なく」と「山吹の花」が取合わされた歌である。また句表現では「色づきにけり」五例、「雪はふりつ」、三例、「うつろひにけり」二例があり、また「色まさりける」「おきまさるらむ」「いままさるらし」「なりまさるなり」などの類句表現が目立つのであり、これらを杜撰な撰歌とみるべきではなく、四勅撰集から直接に古き詞をもつ古歌を抄出した結果、類句表現が多くなったとみるべく、そこに古雅な古歌表現をみる定家の好尚があつたと考へるのである。

この「秀歌大鉢」の意図は「詠歌之大概」で明確に理論化される。

常観三念古歌之景氣、可染心。殊可見習者古今、伊勢物語、後撰、拾遺、三十六人集之中殊上手歌、可懸

心人撰・貫之・忠岑
伊勢・小町等之類

と定家は三代集主義ともみえる立場を述べているが、三代集の全てを許容するものでなかつたことは見習うべき歌人として、人麿、業平、貫之、忠岑、伊勢、小町らの名を挙げていることによつても示されており、これらは「秀歌大鉢」に見てきた古歌の範囲と重なり合っている。たゞ「秀歌大鉢」に業平、小町の歌がみえないことが不審であるが、おそらく「秀歌大鉢」が他の秀歌撰と異なり、古詞を撰歌基準としたところに因由があるのではあるまいか。

「秀歌大鉢」を以上のように古き詞をもつ古歌のアンソロジーとみると、これを明確に規定したのは宗固の言うように「詠歌之大概」の冒頭文の

情以新為先。詞以旧可。用。風鉢可。效。堪能先達之秀歌。

の歌詞に関する割注、「詞以旧可」用。詞不可用。三代集先達之詞也。である。この割注を書いた時、定家の脳裏には明確に「秀歌大鉢」があつたと思われる。割注の「三代集の先達の用ふる所」は「秀歌大鉢」に示した三代集でも古歌に属する歌人達の歌詞であり、「新古今古人の歌」もまた秀歌大鉢に示された万葉伝誦歌、よみ人しらず歌を中心とした新古今の歌であつたと理解

される。こうして「秀歌大幹」は「詠歌之大概」の成立以前に抄出撰歌されたと思われ、「詠歌之大概」の割注は「秀歌大幹」を受けた文言と思われるが、「詠歌之大概」の成立は(1)貞元元年(一二三三)説。(2)毎月抄成立以前説。(3)嘉禎二年(一二三三六)成立説があるが、「秀歌大幹」を貞永元年(一二三二二)天福二年(一二三四)とすれば、二年後の嘉禎二年説がこの面からも妥当であると考えられる。

勿論、「詞は三代集先達の用ふる所を出づべからず」は極めて厳しい歌語の規制であつて、そのまま「秀歌大幹」の例歌の歌詞から一步も出てはならないということにはならないし、その意味では「秀歌大幹」は大凡の枠を示した秀歌撰ということになるが、「秀歌大幹」が「詠歌之大概」の根幹である、見習うべき古歌の範囲と規範とすべき歌詞を例示していることは、定家晩年の古典主義的な詠歌理念を理解する上で極めて重要な秀歌撰であつたと考えられ、それ故に和歌初心者堀河院への進献は極めて適切な処置であつたことになるわけである。

一方、「詠歌之大概」において、「情以新為先。詞以旧可_レ用。風幹可_レ效_三其能先達之秀歌。」という詠歌理念から、風幹に關して「詠歌之大概」に付載する秀歌撰としては「不_レ論_三古今遠近」、見_二宜歌_一、可_レ效_三其幹_一という立場から、八代集を

対象として「香味の覚悟に随い」秀歌を撰んだ「秀歌之幹大略」が付載されるのである。

注1 「藤原定家の研究」第三編歌論、第一章(文雅堂書店・昭32刊)

注2 「平安・鎌倉時代秀歌撰の研究」第三章・第二節・第一項(ひたく書房・昭58刊)

注3 「谷山茂教授国語国文学論集」(塙書房・昭47刊)

注4 国語と国文学(昭10・7)